

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月14日現在

機関番号：32608

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K15810

研究課題名(和文) 第三者の関与を伴う高度生殖医療に対応する看護の探求

研究課題名(英文) Exploration of nursing care for coping with assisted reproductive technology involving third party

研究代表者

岸田 泰子(Kishida, Yasuko)

国立女子大学・看護学部・教授

研究者番号：60294237

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：高度生殖医療(以下ART)の技術革新に伴い、倫理的問題を含むARTが急増し、法的整備が追いつかない中で、看護実践の提供が必要となっている。そこで本研究では、日本における倫理的問題を含むARTにおける看護および看護教育への指針を得ることを目的とし、看護者の体験、医療消費者の体験、看護学生の教育ニーズ、第三者関与の生殖技術が可能なタイと制限が厳しい日本の看護学生の意識の比較検討を行った。得られた結果から、ケアに伴う看護者が抱えるストレスやジレンマを理解すること、対象者への経済的支援と精神的ケア、複雑化するARTに対する看護教育内容の検討、道徳的感受性を高めるような倫理教育が重要であると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は進化するARTに対する看護と倫理的課題を追求する先進的試みであり、今後ますます増えていくと予測される倫理的問題を含むARTをつける当事者のための、看護領域へのアプローチである。本研究で得られた成果は、不妊看護に従事する看護職者に対する示唆を与え、今後この分野における看護ケアへの指針を示すための第1歩となる。

また、日本とタイの二国間においてこれからの看護を担う看護学生に対する調査を実施し、その結果を比較検討する国際性と学際的側面を有している。この結果は看護基礎教育課程において、有益な示唆を与え、日本およびタイにおけるリプロダクティブ・ヘルスの増進のための提言をするものである。

研究成果の概要(英文)：The recent innovation of the assisted reproductive technology (ART) has increasingly caused ethical issues. This study thus aimed to discuss and obtain the guiding principles for practical nursing care and nursing education of the ART causing ethical issues in Japan. We examined and analyzed various experiences of the ART-related medical consumers and the nursing care providers taking part in the ART, and explored the educational needs for nursing students by comparative survey on nursing students' views of the ART between Thailand and Japan. The results showed the importance of understanding the stress and dilemma the nursing care providers experienced; considering the financial support and mental care for the medical consumers; discussing the nursing educational contents about the ART getting more and more complicated; and providing the nursing students with ethics education to improve their moral sensitivity.

研究分野：母性看護学

キーワード：高度生殖医療 倫理的問題 ジレンマ 不妊看護 国際比較

1. 研究開始当初の背景

日本の高度生殖医療（Assisted Reproductive Technology,以下 ART）は世界的にも高い技術レベルを誇る状況にあるが、昨今の ART の技術的革新は、未婚男女の配偶子凍結保存、死後生殖、着床前診断、高齢不妊の第三者卵子提供による治療、同性愛者婚への ART など、非常に複雑で倫理的難題を含む現象を伴っている。現状では、これらの倫理的問題の大きい ART に対して専門職団体のガイドライン等（日本産科婦人科学会、2013）により、その実施が制限されている。それゆえ、国内では実施できない ART を求めて、技術利用の寛容なタイやインドなどのアジア地域へ渡航する日本人が増えている（日比野、2012）。すわなち、不妊治療の果てに国内で実施できない生殖技術を求めて海外渡航をする、いわゆる医療ツーリズムの利用者は増え、今後もその傾向は変わらないものと予測されている（日比野、2012）。実態把握が困難な問題ではあるが、たとえば海外での第三者の卵子提供により妊娠し、日本国内で出産する女性は年間に 300 件を上回る出産数に上るとも試算されている（吉村、2013）。また生まれながら卵巣機能が低下している女性（ターナー症候群）や早発閉経などの不妊女性に対して、日本国内で第三者の卵子提供を呼びかける NPO（NPO 法人 OD-NET）が立ち上がるなど、実際の法整備や世論の合意を待たず、倫理的問題を含む ART 利用者は増えている（日本生殖医学会、2018）。わが国では、ART の実地臨床に関連する法令は存在せず、先進国としては極めて異例といわれている（石原、2012）。一方で、現実問題として存在する、ART を取り巻くマイノリティへの対応について語られることは少ない。医療者、看護師はマイノリティに対して、自分とは対立する価値観に対して中立的もしくは擁護的立場を取ることが望まれる。しかし、知識と専門性をもつがゆえに観念が偏る。そしてマイノリティへの批判的態度を抱いたり、ジレンマに陥ったりするなど、進化する ART の現状と看護師との意識上に摩擦現象が起こっているのではないかと考えられる。さらに卵子提供や代理出産のような第三者が関与する生殖技術は、女性の性と生殖に関する健康（リプロダクティブ・ヘルス）を害し、子どもの福祉の観点からも母子看護の分野においては看過できない問題である。そして、看護教育の中でも進化する ART に関する見解は一致しておらず、教育的指針が明らかでないばかりか、このような視点での国内外の看護研究も進んでいない。

2. 研究の目的

以上のような背景から、本研究では、倫理的問題を含む ART に関して、医療消費者の体験と看護師がケアの中で体験するジレンマを検証し、第三者関与の生殖技術が可能なタイと制限が厳しい日本の看護師の意識や教育ニーズを比較検討し、必要な看護ケアを考察するとともに、看護教育において、グローバル化する ART における倫理的課題をどのように扱い、教育していくかの指針を得ることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、次の 3 つの調査を実施し、それぞれの結果から看護師が体験するジレンマ、不妊治療体験者のニーズ、看護学生の教育ニーズと倫理的問題を含む ART に対する意見を集約し、考察した。

(1) 女性看護師への面接調査【調査 1】

第三者の卵子提供により妊娠、出産した女性へのケアを経験したことのある女性看護師 5 名を対象として、その看護実践の際の思いや態度について半構造化面接を行い、質的帰納的に分析した。

(2) 不妊治療経験者へのインターネット調査【調査 2】

日本において、第三者が関与する高度生殖医療に対する意識について、国内に 1,000 万人以上のリサーチ対象を有する調査会社に依頼し、インターネット調査を実施した。対象者は調査会社に登録している、不妊治療経験のある成人男女各 309 名と不妊治療経験のない女性 309 名とした。また年齢を 30 歳代～40 歳代に限定した。質問内容は、海外での不妊治療経験、第三者の関与を伴う不妊治療やケアに対する意見などである。

(3) 日本とタイの看護学生への質問紙調査【調査 3】

不妊治療における制約が比較的少ないタイ国と国内での制約が多いために海外に治療を求めてツーリズムを行う不妊カップルが増えている日本、この二国間において看護教育への示唆を得るための量的調査を実施した。方法は無記名自記式質問紙調査であり、看護学生の ART (assisted reproductive technology) に対する考え方、教育ニーズ、道徳的感受性 (J-MSQ) (滝沢ら、2015) などをたずねた。日本の看護学生 454 名、タイの看護学生 816 名から回答が得られた。

(4) 本研究における倫理的配慮

研究協力者へ研究の概要、研究者の守秘義務、自由意思での参加と中途辞退の権利の保証について説明し、面接においては同意書にて同意を得た。インターネット調査では、調査に入る前の画面でこれらを告知し、承諾の上で調査を開始することを依頼した。質問紙調査では、調査は無記名であり、自由意思での参加を呼びかけ、不参加の場合も何ら不利益がないこと、答えたくない項目には答えなくて良いことを書面で示し、調査協力をもって同意とみなした。また本研究はすべての調査について、研究者の所属機関における研究倫理審査委員会にて承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 女性看護師への面接調査【調査 1】

協力者 5 名は全員女性で、首都圏の産科施設に勤務しており、助産師が 4 名、看護師が 1 名であった。面接の内容分析の結果、女性看護師が第三者の卵子提供を受けた女性に対する看護実践時に抱いた思い、態度について、71 のコード、12 のサブカテゴリー、6 つのカテゴリーが抽出された。6 つのカテゴリーは[子どもの成長と家族関係の構築に対するネガティブ感情]、[母性を尊重する態度]、[女性の権利と子どもの福祉の間での葛藤]、[自分の思いとは切り離し、職業的倫理観を保つ]、[特殊なケースをケアすることにより生ずる思いやストレス]、[一人の女性と

しての不妊症への思い]であった。看護師は[子どもの成長と家族関係の構築に対するネガティブ感情]と[特殊なケースをケアすることにより生ずる思いやストレス]を抱えながら対象者をケアしていた。一方で、対象者の[母性を尊重する態度]を有し、[女性の権利と子どもの福祉の間での葛藤]も抱いていた。看護師自身が女性であるがゆえに、将来を見据えてそれぞれが[一人の女性としての不妊症への思い]を感じ、自分の価値観と比べることもあったが、看護師は[自分の思いとは切り離し、職業的倫理観を保つ]という中立的立場の上で業務を行っていた。この結果は、青柳の調査(2013)による、助産師は個人的価値観と実践を切り離している、と類似したものであった。

看護師らは複雑な感情とストレスを抱えながら看護を実践しており、自分の価値観と実践を切り離しながらも、その狭間でジレンマを抱く可能性も高いことが示唆された。このような看護師の思いを理解した職場環境の整備が必要であると考えられた。

(2) 不妊治療経験者へのインターネット調査【調査2】

不妊治療経験ありの男性 309 名の平均年齢は 40.0 歳、既婚者 287 名(92.3%)であった。不妊治療経験ありの女性 309 名の平均年齢は 38.9 歳、既婚者 300 名(97.1%)であった。不妊治療経験なしの女性 309 名の平均年齢は 38.8 歳、309 名全員が既婚者であった。不妊治療経験ありの者の治療期間は平均 2.4 年であった。実際に海外で ART を利用した者(男性の場合はパートナーの利用を含む)は男性 21 名(6.8%)、女性 4 名(1.3%)であり、5 回以上利用した男性が 2 名いた。実施した治療方法は、男性は AID12 名、提供精子 9 名、提供卵子 6 名、提供受精卵 2 名、代理母 1 名、代理出産 1 名であった(複数回答)。女性では AID2 名、提供精子 1 名、提供卵子 1 名、提供受精卵 1 名であった(複数回答)。

実施した国はアメリカ、オーストラリア、ドイツ、韓国、マレーシアなどであった。男女ともに希望しなかったと答えたものが大多数であった。希望しなかった理由は、高額であるため、手続きが煩雑なため、配偶者が希望しなかったから、リスクを感じた、言語の問題、などであった。第三者が関与する ART に対して期待する支援は、経済的支援と精神的ケアが最も多くあげられた。

不妊で悩み、多様な治療による患者が増えている。第三者の関与を伴う ART に対して倫理的問題はあるが、それを選択する患者は少数だが存在する。偏見なく看護を提供する必要がある。また第三者が関与するような ART が普及すれば、より複雑なインフォームド・コンセントも必要であるし(久保、2008)、不妊治療経験者の多くは精神的ケアを望んでいることを踏まえてケアを実施する必要があると考えられた。

(3) 日本とタイの看護学生への質問紙調査【調査3】

日本の看護学生 454 名、タイの看護学生 816 名の結果を比較したところ、ART の将来的な利用についてはタイの学生のほうが利用を希望するものが多く、日本の学生は「わからない」と答えたものが半数で最も多かった。また第三者が関与する ART については、看護師の立場として容認する者の割合は日本の方が多かった($p < .001$)。看護教育の中で第三者が関与する ART やそ

の看護について学んだ経験は、タイの学生のほうが「あり」と答えた者が多かった(p<.001)。しかし、不妊看護や第三者が関与する ART の看護について現状よりもっと必要であると考えている学生はタイでは 8 割以上、日本では 9 割以上であり、高い教育ニーズを有していた。道徳的感受性については、9 項目のうち 5 項目はタイより日本の学生のほうが低く(p<.001)、3 項目は日本の学生のほうが高かった(p<.001)。道徳的感受性尺度の全項目平均値の比較では日本の学生のほうが有意に低かった(p<.001)。以上のことより、進化する ART に対応し、また第三者が関与する ART についても看護教育内容を充実させるとともに、学生らの道徳的感受性を高めるような倫理教育を検討する必要があると考えられた。

<引用・参考文献>

日本産科婦人科学会ホームページ

<http://www.jsog.or.jp/activity/guideline.html> (2019 年 2 月 25 日アクセス)

日比野由利、タイの医療ツーリズムと生殖産業、産科と婦人科、79 巻 1 号、2012、94 - 100
吉村泰典、生殖補助医療により生まれた児の長期予後の検証と生殖補助医療技術の標準化に関する研究、厚生労働研究報告書、2013

NPO 法人 OD-NET ホームページ

<https://od-net.jp/about/about.html> (2019 年 2 月 25 日アクセス)

日本生殖補助医療標準化機関ホームページ

<https://jisart.jp/> (2019 年 2 月 25 日アクセス)

石原理、第三者の関与する生殖医療 日本と世界の比較、母子保健情報、66 巻、2012、76 - 79

青柳優子、不妊治療後の産婦に対する助産師の実践と不妊に関する意識および不妊治療の許容度との関連、母性衛生、54 巻 2 号、2013、325 - 334

滝沢美世志、太田勝正、改訂道徳的感受性質問紙日本語版(J-MSQ)の学生版第 1 版の開発、日本看護倫理学会誌、7 巻 1 号、2015、4 - 10

久保春海、卵子提供におけるカウンセリング、産婦人科治療、96 巻 1 号、2008、84 - 89

日本生殖医学会ホームページ

http://www.jsrm.or.jp/guideline-statem/guideline_2018_01.html (2019 年 2 月 25 日アクセス)

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計 2 件)

Y.Kishida, M. Yamaguchi and I. Morioka, Current attitude toward assisted reproductive technology involving third party and the desired nursing support in Japan , The World Academy of Nursing Science (WANS)International Nursing Research Conference, October 20-22,2017, Bangkok.

岸田泰子、山口雅子、第三者の卵子提供を受けた女性に対する看護実践時の女性看護者の態度、
第 57 回日本母性衛生学会学術集会、2016 年 10 月 14 日 - 15 日、東京都 .

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：久保恭子

ローマ字氏名：KUBO Kyoko

所属研究機関名：東京医療保健大学

部局名：看護学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：10320798

研究分担者氏名：石井久生

ローマ字氏名：ISHII Hisao

所属研究機関名：共立女子大学

部局名：国際学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：70272127

(2)研究協力者

研究協力者氏名：山口雅子

ローマ字氏名：YAMAGUCHI Masako

所属研究機関名：和歌山県立医科大学

部局名：保健看護学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：60259653

研究協力者氏名：森岡郁晴

ローマ字氏名：MORIOKA Ikuharu

所属研究機関名：和歌山県立医科大学

部局名：保健看護学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：70264877